

原油価格、および為替のガソリン価格への転嫁構造

—円安によるガソリン値上がりへの影響—

計量分析ユニット 需給分析・予測グループ 研究主幹

柳澤 明

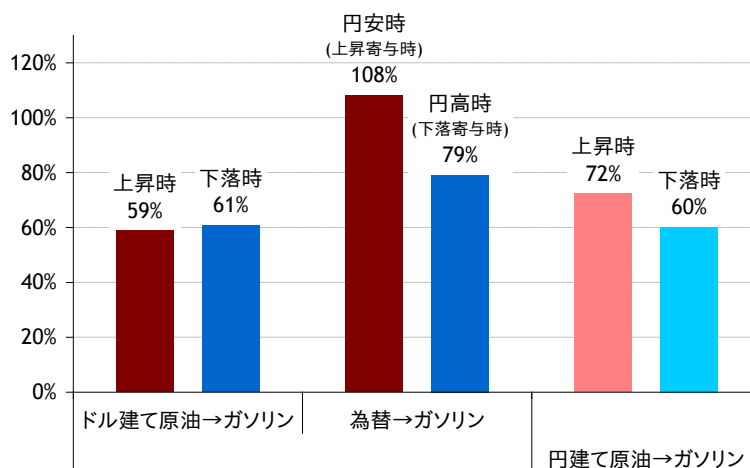
要旨

ガソリン価格の上昇が続いている。2013年2月11日、ガソリン小売価格は9か月ぶりの高値となる¥153.8/Lを記録した。今次的上昇が始まった2012年11月半ばからの上げ幅は¥8/Lに達した。その背景には原油価格の上昇がある。もっとも、ドル建て原油(東京市場、中東産)はここ3か月ほどは-\$107/bbl前後という高値水準とはいえ—安定的に推移していた。円建て原油価格を押し上げているのは、急速に進行している円安である。

原油コストは、ガソリン税(¥53.8/L)と並び、ガソリン価格の費用構成で最大の部分を占める。そのため、原油価格の動向、および原油価格のガソリン価格への転嫁構造は、ガソリン価格を左右する大きな要因である。

本論文では、円建て原油価格の変動をドル建て原油価格要因と為替要因に分解した上で、これら2要因のガソリン価格への転嫁構造を分析した。ドル建て原油価格要因の転嫁率は、上昇時が59%、下落時が61%であった。いずれも完全転嫁をかなり下回るが、転嫁は対称である。為替要因の転嫁率は、円安(上昇寄与)時は完全転嫁を超える108%であったのに対し、円高(下落寄与)時は79%に過ぎず、転嫁の非対称性が認められた。この3か月(2011年11月19日~2013年2月4日)の為替変動は、ガソリン価格の¥7/L超の押し上げに寄与した。ドル建て原油価格が\$110/bblの時、¥1/\$の円安はガソリンの¥0.79/Lの値上げ圧力になる。円建て原油価格から直接推計した転嫁率は、推計期間における上記2要因の転嫁率の一種の加重平均値と理解できるが、上昇時が72%、下落時が60%であった。

原油価格、為替のガソリン価格への転嫁率



低い転嫁率はガソリンビジネス—とりわけ流通部門—の厳しさの反映であり、その厳しい環境下での収益確保への努力が非対称性となって表れている。為替要因の転嫁が非対称である一方、ドル建て原油価格要因が対称であるのは、ガソリン価格を広く報道されるドル建て原油価格に強固に結びつけて考える社会認識が影響している可能性がある。

キーワード: ガソリン価格、原油価格、為替、転嫁